「光彩」～遥かシルクロードの彼方から～

２０００年の特別公演記念曲の「光彩」。アジア大陸から大草原・大海原を越えて日本へと伝わった絃の調べが会場いっぱいに広がりました。光り輝き、観客を包み込んだ、その感動の旋律を再現すべく、今公演では地元アーティストと共に新バージョンでお届けいたします！

光　彩

原案　村上由哲
作詞　布施谷貞雄
作曲　しかたたかし
歌　村上由哲

風が　わたる
草原　こえて
絃歌の調ひびく
海原こえて

祈りはるかな　悠久の時
絃歌の調むすぶ
人の魂を

＊セリフ

風走るモンゴルの草原から
悠久の時を刻む　中国の大地へ
大海原を越え　琉球・沖縄
まほろばの里　大和へ
絃歌は流れ　光彩あふる

魂にひびく
絃歌の調

あぁ　まほろば
まほろばの里へ

▲ 2002年、CD『光彩』の収録風景。（東京）

◀馬頭琴

胡弓▶

▼津軽三味線

▼三線

私は二〇〇〇年の夏、取材で中国の敦煌莫高窟を訪れた。東西文明の大動脈、シルクロードの要衝、砂漠の大画廊と称される莫高窟。オアシスと並行する断崖の洞窟内は、仏教説話を中心にした絵画・塑像などで埋めつくされており、誠に壮観であった。

その絵画の中に異国の弦楽器があった。梅花琵琶・玉琵琶・曲頸琵琶など。これらの楽器は古代ローマからシルクロードを経て東の果て、敦煌にまで伝わった弦楽器である。

妙なる音色をもつこの楽器は、時代の流れにのって、中国大陸から、琉球諸島に伝わり三線となった。また韓半島から日本へ。北前船などの交易と共に北へ伝わり、津軽三味線となって定着した。

奈良の正倉院には、世界で唯一現存する「螺旋紫檀五絃琵琶」が飾られており、その幽玄の調べが想像される。なんと壮大な物語であろうか。

村上由哲さんは、ぜひ、その流れを舞台で表現したいと提案。オリジナル作品「光彩」が創作された。

モンゴルの馬頭琴奏者・中国の胡弓奏者・沖縄の三線奏者との競演で、二〇〇〇年秋の特別公演「海と草原とまほろばの絃歌」（宮崎県民芸術祭参加作品）として結実した。

以来、十四年、今回は、発想を変えて洋楽器との競演を望まれ、賛同した音楽家との競演が実現した。

成果のほどを、どうぞ、お楽しみ下さい。

演出家　布施谷貞雄